

## 育児休業の取得について（職員へのメッセージ）

丸亀市は、市長等の特別職が、育児や介護、出産に要する時間を確保することによって、「ワーク・ライフ・バランス(仕事と家庭の調和)」の取組みを率先して進めるため、「丸亀市長等の育児等と公務に関する条例」案を、4月29日開催される臨時議会に提案しました。

私自身、本年1月に娘を授かりましたことから、本条例案が可決されれば、これに則って、4月28日から5月24日まで、育休を取得したいと思います。

育休については、以前から、「自分に子どもができたときには、取得しよう」と思っていました。

理由は、男女を問わず、各々が家庭責任を果たしながら、仕事においても能力を十分に発揮できる社会が今後目指すべき理想の形であり、そのために、自分ができることに前向きに取り組んでいきたいと思っていたからです。

娘が誕生してから、その思いはますます強くなりました。

妻が実家で出産をして後しばらくは、妻の母の協力もあり、大変助かりましたが、2月末にこちらに帰ってからは、様々な問題にぶつかりながら、夫婦二人で力をあわせて育児をしてきました。

あらためて、育児の大変さを感じさせられました。

特に、朝から晩まで24時間、生まれたばかりの子どもと母親、二人きりでの子育てというものは、精神的にも、体力的にも、非常に追い詰められるものだということがよくわかりました。

夜中、娘が2時間おきに泣いて、妻が眠れない日何日も続いたときがありました。

「大切な我が子であるにもかかわらず、泣きやまないことにイラッとしてしまった」。翌朝、妻がポツリとそう話すのを聞いて、ドキッとしました。

妻が苦しんでいるその時間、私は、「仕事に差し支えるから」と言い残して、一人2階で寝ていました。

「今の自分は、仕事を言い訳に、子育ての「手伝い」をしているに過ぎないのでは。育児にもっと正面から、向かわなければならぬ」。そう思った瞬間でした。

もちろん、子育てをすることで、得られる喜びもたくさんあります。

子どもはすぐに成長します。いろんな表情をして、いろんな声を出して、いろんな風に泣きます。

先日、私が子どもを抱いている時に、大きなくしゃみをしてしまいました。すると、私の腕の中で、彼女はびっくりして、大きくビクンとし、そして、ギロツと私をにらみつけてきました。くしゃみをして、あんなに強くにらまれたのは初めてで、夫婦そろって思わず大笑いをしてしまったものです。

そんな生涯、思い出に残るであろう大切な一瞬は、今しかありません。

彼女もきっとすぐに寝返りをし、ハイハイをして、つかまり立ちをして、成長していくのでしょう。

「その全ての瞬間を見ることはできなくても、少しでも多くの時間を、父親として共有したい」。そう思いました。

しかしながら、私には、副市長としての立場があります。育休を取得するにしても、期間はどの程度取るのかが問題でした。

短期間であれば、周囲への影響は少なくなります。しかし、それで、父親として、母親と二人で子育てをしたと胸を張って言えるのか。自己満足のため、自分の休暇を利用して、一時的に子育ての手伝いをしたというポーズを取りたいだけなのではないかとも思いました。

一方で、育休期間中は、周りのサポートが不可欠であり、また、仕事への影響を考えると、副市長の職責にある者が長期の育休を取得することが、果たして許されるのか、正直、悩みました。

葛藤し、最後の決断ができないまま、日にちだけが過ぎていきました。

年度が替わり、4月2日に開催された庁議において、「丸亀市男女共同参画推進研究会」により、「丸亀市役所男性職員の育児休業取得推進のために必要なこと」と題する研究報告が発表されました。

その中で、丸亀市役所では、これまで男性職員のうち育児休業を取得した人は一人もいない現状等が示されました。おそらく、育休を取得したくてもできなかった男性職員が多くいたのではと推測されます。

研究会の報告を聞いて、これまでモヤモヤしていた気持ちがスッキリしました。

男性職員の育休取得問題についての考え方の根本は、「社会」として、育休の必要性をどう判断するかだと思います。

私は、夫婦で仕事と家事・育児をともに楽しむ社会が理想であり、男性も育休を取得できる職場風土をつくりたいと思っています。

そして、「社会として育休が必要である」と考えるならば、今の状況を変えるために、取得できる環境にある者が率先して取る。その積み重ねが、「社会」を確実に変

える力になるとものと確信します。

以上のような考えから、最終的に、市長に許可をいただき、約一月間の育休を取得することを決断いたしました。

今後、これを機に、職場での環境づくりを進め、男性職員が育休を取得できない現実の壁を打ち破り、丸亀市役所として、ワーク・ライフ・バランスの取組みを積極的に推進したいと思います。

副市長の職にある者が、一月という長期にわたる育休を取得することについては、市民の皆様からのご批判も含めて、多様な考えがあると思います。それが、今の社会の実態です。

私といたしましては、今回、問題提起をすることで、得られた課題を整理して、男女がともに家庭生活を両立しながら、楽しく仕事ができる市役所をつくりたいと考えています。

職員の方のご理解とご協力をお願いします。

最後に、「丸亀市男女共同参画推進研究会」の研究報告書の最後の一節を記して、終わりいたします。

今から、男性職員の育児休業取得促進、職員全員のワーク・ライフ・バランス推進に取り組まなければならない。そして、効果が出るまでやり続けなければならない。

それがひいては、職員一人ひとりが持つ多様な能力の発揮による、行政サービスの質の向上につながると思う。

今こそ、本気ではじめる時である。